2024 年 6月22日

# 予選審査に関する審査委員長からのコメント

第 35 回高専プロコン（奈良大会）
審査委員長　大場　みち子

「新型インフルエンザ等感染症」の拡大に伴うオンライン開催が続きましたが、第 33 回群馬大会、第 34 回福井大会に続いての現地開催で、昨年度に次ぐ参加校数、過去最高の作品数となり、大変うれしく思っています。高専の活動の制約がなくなった状況との認識で、今回は課題部門国内 40 作品、海外 3 作品、自由部門国内 57 作品、海外 7 作品、競技部門国内 58 作品、海外　6 作品の応募がありました。開催概要の公開から短い期間でアイデアを絞り込み、具体的な実現方式を検討し、魅力的で独創的な作成にブラッシュアップして作品に仕上げてきた結果でしょう。各作品は豊かな表現で、分かりやすく提案にまとまっていて、学生の皆さんの創意、工夫と日頃の努力、熱意が伝わる提案に仕上がっていました。指導教員や関係者の皆さまのご支援やご尽力がプラスに働いていることにも感謝いたします。

課題部門の今回のテーマは「ICT を活用した環境問題の解決」です。現在直面しているさまざまな環境問題をチームそれぞれの視点で捉え、ユニークなアイデアと持ちうる技術を駆使して「何とか解決してやろう！」という熱い思いを感じる作品が多くありました。さて、予選審査で審査員が最も重視していることは応募作品の「独創性」で、次いで重視していることは「有用性」と「実現可能性」です。とても上手に独創性や有用性を説明できている作品がある一方で、残念ながら独創性に関して明確な説明がないものも一部で見られました。独創性を明確に示すことは最低限ですが、それによってどのような効果（価値）が生まれるのか、といったところまできちんと記述すると独創性や有用性が審査委員に伝わりやすくなると思います。本選では、システムの独創的な点や有用性、システムにかける熱い思いをしっかりとプレゼンしてくれることを楽しみにしています。

自由部門では、自由な発想のもとにバラエティに富んだ作品が提案されていました。健康、環境・防災、観光、学習支援、身近な課題改善などこれまでの恒例分野のほか、新しい感情の伝え方などの新分野も登場しました。多様性が拡大していることを感じました。今回もボーダーラインに作品が集中して接戦となりました。自由部門も課題部門と同様、「独創性」を重視していますが、「実現可能性」も審査項目に入っています。実現できない独創性は評価できません。実現可能性についてもきちんと言及することが大切です。実現方法として、生成 AI を利用する作品が多数ありましたが、生成 AI をどのように利用するのか、入力・出力は何か、そこでの独創性は何かを具体的に、わかりやすく説明してほしいと思います。

競技部門は各チームとも工夫を凝らした方法が提案され、概ね具体的に書かれていて良い傾向です。しかし、一部の作品では記述が不十分でした。特に、アルゴリズムの特徴について、具体的に示さないと評価ができませんので、きちんと書きましょう。どの作品についても、本選での活躍が楽しみです。

以上が一審査員としての簡単なコメントです。予選を通過した作品は、本選に向けて、さらに作品の内容が充実することを大いに期待しています。

以上